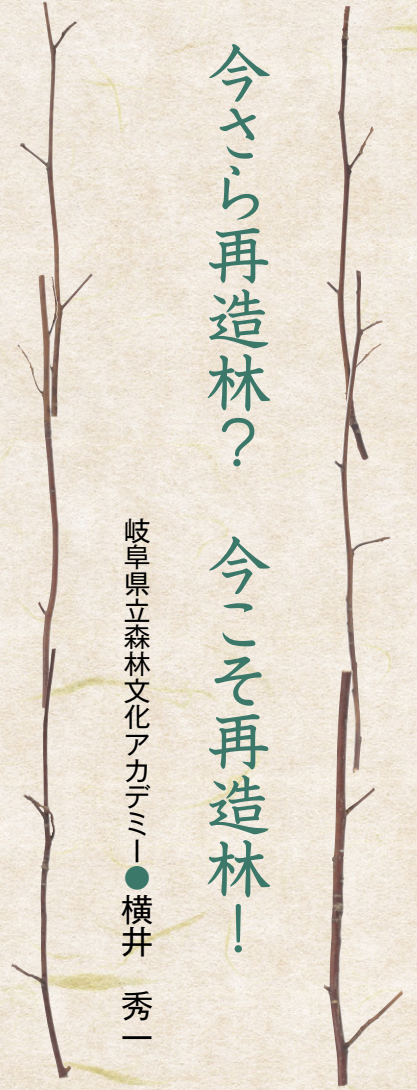


今さら再造林？ 今こそ再造林！

岐阜県立森林文化アカデミー ● 横井 秀一



「国産材時代の到来だ」と言われて久しくなります。川上では、素材生産を進めるための施策がいろいろと打たれています。川下でも、既存の製材工場や合板工場が外材から国産材にシフトしたり、国産材をターゲットにした大型工場が新規に稼働したりで、素材生産と木材流通が活発化しています。これに拍車をかけるように、木質バイオマス利用も本格化してきました。

木材資源がもてはやされる理由の一つに、それが循環型資源であることが挙げられます。確かにそのとおりなのですが、これは、適切な資源管理がなされてこそ実現できることです。私たちは、資源収奪型の利用が国土を荒廃させたという苦い経験を忘れてはなりません。

それでは、資源循環型の森林利用とは、どういうことでしょうか。森林を

利用するために伐採すれば、その瞬間に、そこに存在した資源はゼロになります。いったんゼロになった資源を再び利用できるまでに回復させる。十分に回復したらまた利用する。これを繰り返すこと、すなわち利用と再生のセットが資源の循環利用です。

森林の再生のことを更新とも言います。これに該当する英単語は、「regeneration」または「reproduction」です。前者は「世代交代」、後者は「再生産」という意味です。森林の世代を交代させ、再び生産に転じる、このことなくして森林資源の循環利用はあり得ません。

私たちは、森林から多くを享受して生活してきました。その過程で、森林の質も変えてきました。原生林を薪炭林としての二次林に、二次林を針葉樹人工林へと、社会の需要に応える生産を実現するために、森林の形を変えてきたのです。当然、いま行われている

収穫の後も、その先の社会を見据えて、その要求に応えられるような森林をつくっていく必要があります。もちろん、木材資源に限らず、様々な機能に対する要求に応えるということを含めての話です。

このように考えていくと、とても重要なことに気づきます。森林の更新の場面は、唯一と言ってもいいくらい、森林の姿を変えるチャンスなのです。この機会を活かさない手はありません。目的でみると、①同じような生産を繰り返す、②違う生産を行う、③もう生産をしない、といった選択があるかと思えます。その選択に合わせるか、樹種を変える（適地適木という制約の中で）、品種を選ぶ、ということが可能です。どんな森林を未来に残したいのか、この機会を逃さずに考え、それを実現していきたいものです。

更新の方法には、人工更新（主に植栽）と天然更新があります。ここでは、積極的に打って出る植栽について、もう少し考えてみましょう。植栽には苗が必要です。今、この苗が手に入りにくい状況になっているのです。造林面積の縮小とともに苗の需要が減り、生産者の高齢化とも相まって、苗木生産業者が激減したのです。せっかく再造林しようと思っても、苗がなければ始まりません。民間事業者と行政とが一体となって、苗の生産と供給の体制を再構築することが必要です。

まず、造林用苗には配布区域の制限がありますから、どの地域でどんな樹種の苗を作るか（岐阜県でいえば、どこでスギの苗を生産するか）を考えなければなりません。品種については、ぜひ、精英樹選抜育種の成果を反映させたいところです。どんな形態の苗を生産するのも、造林事業者とともに考えていく必要があるでしょう。苗はどんどん育っていくので、ストックしておくことができません。必要数量を把握して、過不足なく生産するのがベストです。

ともかくにも、戦略的に取り組む必要があります。

今こそ、再造林の意義を再確認し、その準備を始めるときなのです。